

悟浄歎異

—沙門悟浄の手記—

中島敦

青空文庫

昼餉ひるげののち、師父しふふが道ぼたの松の樹の下でしばらく憩いこうておられる間、悟空ごくうは八戒はっかいを近くの原つばに連出して、変身の術の練習をさせていた。

「やってみろ！」と悟空が言う。「竜りゆうになりたいとほんとうに思うんだ。いいか。ほんとうにだぜ。この上なしの、突きつめた気持で、そう思うんだ。ほかの雑念はみんな棄すててだよ。いいか。本気にだぜ。この上なしの・とことんの・本気にだぜ。」

「よし！」と八戒は眼を閉じ、印いんを結んだ。八戒の姿が消え、五尺ばかりの青大将あおだいしようが現われた。そばで見えていた俺おれは思わず吹出してしまった。

「ばか！ 青大将にしかねないのか！」と悟空が叱しかった。青大将が消えて八戒が現われた。「だめだよ、俺おれは。まったくどうしてかな？」と八戒は面目なげに鼻を鳴らした。

「だめだめ。てんで気持が凝こらないんじゃないか、お前は。もう一度やってみろ。いいか。真剣に、かけ値なしの真剣になつて、竜になりたい竜になりたいと思うんだ。竜になつたという気持だけになつて、お前というものが消えてしまえばいいんだ。」

よし、もう一度と八戒は印を結ぶ。今度は前まえと違つて奇怪なものが現われた。錦蛇にしきへびには違いないが、小さな前肢まえあしが生えていて、大蜥蜴おおとかげのようでもある。しかし、腹部は

八戒自身に似てブヨブヨ膨ふくれており、短い前肢で二、三步匍はうと、なんとも言えない無ぶかつ恰好こうさであった。俺はまたゲラゲラ笑えてきた。

「もういい。もういい。止やめろ！」と悟空が怒鳴る。頭を搔かき搔かき八戒が現われる。

悟空。お前の竜になりたいという気持が、まだまだ突きつめていないからだ。だからだめなんだ。

八戒。そんなことはない。これほど一生懸命に、竜になりたい竜になりたいと思いつめているんだぜ。こんなに強く、こんなにひたむきに。

悟空。お前にそれができないということが、つまり、お前の気持の統一がまだ成っていないということになるんだ。

八戒。そりやひどいよ。それは結果論じゃないか。

悟空。なるほどね。結果からだけ見て原因を批判することは、けっして最上のやり方じゃないさ。しかし、この世では、どうやらそれがいちばん実際的に確かな方法のようだぜ。今のお前の場合なんか、明らかにそうだからな。

悟空によれば、変化へんげの法とは次のごときものである。すなわち、あるものになりたいと

いう気持が、この上なく純粹に、この上なく強烈であれば、ついにはそのものになれる。
 なれないのは、まだその気持がそこまで至っていないからだ。法術の修行とは、かくのご
 とく己おのれの気持を純一無垢むく、かつ強烈なものに統一する法を学ぶに在ある。この修行は、かな
 りむずかしいものには違いないが、いったんその境に達したのちは、もはや以前のような
 大努力を必要とせず、ただ心をその形に置くことによつて容易に目的を達しうる。これは、
 他の諸芸におけると同様である。変化へんげの術が人間にできずして狐狸こりにできるのは、つまり、
 人間には関心すべき種々の事柄があまりに多いがゆえに精神統一が至難であるに反し、野
 獣は心を勞すべき多くの瑣事さじを有もたず、したがつてこの統一が容易だからである、云々うんぬん。

悟空ごくうは確かに天才だ。これは疑いない。それははじめてこの猿さるを見た瞬間にすぐ感じ取
 られたことである。初め、赭あから・顔がお・鬚ひげ・面づらのその容貌ようぼうを醜みにくいと感じた俺おれも、次の瞬間
 には、彼の内から溢あふれ出るものに圧倒されて、容貌のことなど、すっかり忘れてしまった。
 今では、ときにこの猿の容貌を美しい（とは言えぬまでも少なくともとりっぱだ）ときえ感
 じるくらいだ。その面つら・魂たましいにもその言葉つきにも、悟空が自己に対して抱いている信賴
 が、生き生きと溢あふれている。この男は嘘うそのつけない男だ。誰に対してよりも、まず自分に

対して。この男の中には常に火が燃えている。豊かな、激しい火が。その火はすぐにかたわらに在る者に移る。彼の言葉を聞いているうちに、自然にこちらも彼の信ずるとおりに信じないではいられなくなってくる。彼のかたわらに在るだけで、こちらまでが何か豊かな自信に充ちてくる。彼は火種。世界は彼のために用意された薪。世界は彼によつて燃されるために在る。

我々にはなんの奇異もなく見える事柄も、悟空の眼から見ると、ことごとくすばらしい冒険の端緒だつたり、彼の壮烈な活動を促す機縁だつたりする。もともと意味を有つた外の世界が彼の注意を惹くというよりは、むしろ、彼のほうで外の世界に一つ一つ意味を与えていくように思われる。彼の内なる火が、外の世界に空しく冷えたまま眠っている火薬に、いちいち点火していくのである。探偵の眼をもつてそれらを探し出すのではなく、詩人の心をもつて（恐ろしく荒つぽい詩人だが）彼に触れるすべてを温め、（ときに焦がすおそれ）懼れもないではない。）そこから種々な思いがけない芽を出させ、実を結ばせるのだ。だから、渠・悟空の眼にとつて平凡陳腐なものは何一つない。毎日早朝に起きると決まつて彼は日の出を拝み、そして、はじめてそれを見る者のような驚嘆をもつてその美に感じ入っている。心の底から、溜息をついて、讚嘆するのである。これがほとんど毎朝のこ

とだ。松の種子から松の芽の出かかっているのを見て、なんたる不思議さよと眼を瞠（みは）るのも、この男である。

この無邪気な悟空の姿と比べて、一方、強敵と闘っているときの彼を見よ！ なんと、みごとな、完全な姿であろう！ 全身些かの隙もない逞しい緊張。律動的で、しかも一分のむだもない棒の使い方。疲れを知らぬ肉体が歓び・たけり・汗ばみ・跳ねている・その圧倒的な力量感。いかなる困難をも欣んで迎える強靱な精神力の横溢。それは、輝く太陽よりも、咲誇る向日葵よりも、鳴盛る蟬よりも、もつと打込んだ・裸身の・壮（さか）な・没我的な・灼熱した美しさだ。あのみつともない猿の闘っている姿は。

一月ほど前、彼が翠雲山中で大いに牛魔王と戦ったときの姿は、いまだにはつきり眼底に残っている。感嘆のあまり、俺はそのときの戦闘経過を詳しく記録に取っておいたくらいだ。

……牛魔王一匹の香と変じ悠然として草を喰いたり。悟空これを悟り虎に変じ駈け来たりて香を喰わんとす。牛魔王急に大豹と化して虎を撃たんと飛びかかる。悟空これを見て狻猊となり大豹目がけて襲いかかれば、牛魔王、さらばと黄獅に

変じ霹靂のごとくに哮つて狡猾を引裂かんとす。悟空このとき地上に転倒すと見えしが、ついに一匹の大象となる。鼻は長蛇のごとく牙は筍に似たり。牛魔王堪えかねて本相を顕わし、たちまち一匹の大白牛たり。頭は高峯のごとく眼は電光のごとく双角は両座の鉄塔に似たり。頭より尾に至る長さ千余丈、蹄より背上に至る高さ八百丈。大音に呼ばわつて曰く、爾惡猴今我をいかんとするや。悟空また同じく本相を顕わし、大喝一声するよと見るまに、身の高さ一万丈、頭は泰山に似て眼は日月のごとく、口はあたかも血池にひとし。奮然鉄棒を揮つて牛魔王を打つ。牛魔王角をもつてこれを受止め、兩人半山の中にあつてさんざんに戦いければ、まことに山も崩れ海も湧返り、天地もこれがために反覆するかと、すさまじかり。……

なんとという壯観だつたらう！ 俺はホツと溜息を吐いた。そばから助太刀に出ようという気も起こらない。孫行者の負ける心配がないからというのではなく、一幅の完全な名画の上にさらに拙い筆を加えるのを愧じる気持からである。

災厄は、悟空の火にとつて、油である。困難に出会うとき、彼の全身は（精神も肉体

も) 焰々えんえんと燃上がる。逆に、平穩無事へいゑんむじのとき、彼はおかしいほど、しよげている。独樂こまのように、彼は、いつも全速力ぜんそくりきで廻まわつていなければ、倒れてしまうのだ。困難くわんなんな現実も、悟空にとつては、一つの地図——目的地への最短の路がハッキリと太く線を引かれた一つの地図として映るらしい。現実の事態の認識と同時に、その中にあって自己の目的に到達すべき道が、実に明瞭めいりょうに、彼には見えるのだ。あるいは、その途みち以外の一切が見えない、といったほうがほんとうかもしれない。闇夜やみよの発光文字のごとくに、必要な途みちだけがハッキリ浮かび上がり、他は一切見えないのだ。我々鈍根どんこんのものがいまだ茫然ぼうぜんとして考えも纏まとまらないうちに、悟空はもう行動を始める。目的への最短の道に向かつて歩き出しているのだ。人は、彼の武勇や腕力を云々うんぬんする。しかし、その驚くべき天才的な智慧ちえについては案外知らないようである。彼の場合には、その思慮や判断があまりにも渾然こんぜんと、腕力行為の中に溶け込んでいるのだ。

俺おれは、悟空の文盲もんもうなことを知っている。かつて天上で弼馬温ひつばおんなる馬方うまかたの役に任せられながら、弼馬温の字も知らなければ、役目の内容も知らないでいたほど、無学なことをよく知っている。しかし、俺は、悟空の(力と調和された)智慧ちえと判断の高さを何ものにも優まして高く買う。悟空は教養が高いとさえ思うこともある。少なくとも、動物・植

物・天文に関するかぎり、彼の知識は相当なものだ。彼は、たいていの動物なら一見してその性質、強さの程度、その主要な武器の特徴などを見抜いてしまう。雑草についても、どれが薬草で、どれが毒草かを、実によく心得ている。そのくせ、その動物や植物の名称（世間一般に通用している名前）は、まるで知らないのだ。彼はまた、星によつて方角や時刻や季節を知るのを得意としているが、角宿かくしゆくという名も、心宿しんしゆくという名も知りはしない。二十八宿しやくくの名をことごとくそらんじていながら、実物ほんものを見分けることのできぬ俺と比べて、なんとという相異だろう！ 目に一丁字いっぺいじのないこの猴さるの前まへにいるときほど、文字による教養の哀れさを感じさせられることはない。

悟空ごんくうの身体ていしの部分部分ぶぶんぶぶんは——目も耳も口も脚も手も——みんないつも嬉うれしくて堪たまらないらしい。生き生きとし、ピチピチしている。ことに戦う段になると、それらの各部分かくぶぶんは歓喜かんきのあまり、花にむらがる夏の蜂はちのようにいっせいにワアーツと歓声かんせいを挙げるのだ。悟空の戦いぶりが、その真剣まけんな気魄きぱくにもかかわらず、どこか遊戯ゆうげの趣おもむきを備えているのは、このためであろうか。人はよく「死ぬ覚悟しんごで」などというが、悟空という男はけっして死ぬ覚悟しんごなんかしない。どんな危険けんけんに陥おちつた場合ばいばいでも、彼はただ、今自分のしている仕事しごと（妖ようか

怪を退治するなり、三蔵法師を救い出すなり)の成否を憂えるだけで、自分の生命のことなどは、てんで考えの中に浮かんでこないのである。太上老君の八卦炉中に焼殺されかかったときも、銀角大王の泰山・須弥山・峨眉山の三山の下に押し潰されそうになったときも、彼はけっして自己の生命のために悲鳴を上げはしなかった。最も苦しんだのは、小雷音寺の黄眉老仏のために不思議な金鏡の下に閉じ込められたときである。推せども突けども金鏡は破れず、身を大きく変化させて突破ろうとしても、悟空の身が大きくなれば金鏡も伸びて大きくなり、身を縮めれば金鏡もまた縮まる始末で、どうにもしようがない。身の毛を抜いて錐と変じ、これで穴を穿とうとしても、金鏡には傷一つつかない。そのうちに、ものを蕩かして水と化するこの器の力で、悟空の臀部のほうがそろそろ柔らかくなりはじめたが、それでも彼はただ妖怪に捕えられた師父の身の上ばかりを氣遣っていたらしい。悟空には自分の運命に対する無限の自信があるのだ(自分ではその自信を意識していないらしいが。)やがて、天界から加勢に来た亢金竜がその鉄のごとき角をもって満身の力をこめ、外から金鏡を突通した。角はみごとに内まで突通したが、この金鏡はあたかも人の肉のごとくに角に纏いついて、少しの隙もない。風の洩るほどの隙間でもあれば、悟空は身をけし粒と化して脱れ出るの

だが、それもできない。半ば臀部は溶けかかりながら、苦心慘憺さんたんの末、ついに耳の中から金箍棒きんそぼうを取出して鋼鑽きりに変え、金竜の角の上に孔あなを穿うち、身を芥子粒けしつぶに変じてその孔あなに潜ひそみ、金竜に角を引抜かせたのである。ようやく助かったのちは、柔らくなつた己おのれの尻しりのことを忘れ、すぐさま師父しふの救い出しにかかるのだ。あとになつても、あのときは危なかつたなどとけつして言つたことがない。「危ない」とか「もうだめだ」とか、感じたことがないのだろう。この男は、自分の寿命とか生命とかについて考えたこともないに違いない。彼の死ぬときは、ポクンと、自分でも知らずに死んでいるだろう。その一瞬前までは澆刺はつちつと暴れ廻まわつているに違いない。まったく、この男の事業は、壮大という感じはしても、けつして悲壮な感じはしないのである。

猿さるは人真似ひとまねをするというのに、これはまた、なんと人真似をしない猴さるだろう！ 真似どころか、他人から押付けられた考えは、たといそれが何千年の昔から万人に認められている考え方であっても、絶対に受付けられないのだ。自分で充分に納得なつとくできないかぎりは。

因襲いんしゅうも世間的名声もこの男の前にはなんの権威もない。

悟空ごくうの今一つの特色は、けつして過去を語らぬことである。というより、彼は、過去すぎぞつたことは一切忘れてしまいうらしい。少なくとも個々の出来事は忘れてしまうのだ。その代わり、一つ一つの経験の与えた教訓はその都度つど、彼の血液の中に吸収され、ただちに彼の精神および肉体の一部と化してしまふ。いまさら、個々の出来事を一つ一つ記憶している必要はなくなるのである。彼が戦略上の同じ誤りをけつして二度と繰返さないのである。これは判るわか。しかも彼はその教訓を、いつ、どんな苦い経験によつて得たのかは、すつかり忘れ果てている。無意識のうちに体験を完全に吸収する不思議な力をこの猴さるは有つてゐるのだ。

ただし、彼にもけつして忘れることのできぬ怖ろしい体験がたった一つあつた。あるとき彼はそのときの恐ろしさを俺おれに向かつてしみじみと語つたことがある。それは、彼が始めて釈迦しやくかに如来にやうらいに知遇ちぐうし奉つたときのことだ。

そのころ、悟空は自分の力の限界を知らなかつた。彼が藕糸歩雲ぐうしほうんの履くつを穿はき鎖子黄金さしきんの甲よろいを着け、東海竜王とうかいりゆうおうから奪つた一万三千五百斤きんの如意金箍棒にょいきんそごぼうを揮ふるつて闘うところ、天上にも天下にもこれに敵する者がないのである。列仙れつせんの集まる蟠桃会はんとうえを擾さわがし、そ

の罰として閉じ込められた八卦炉をも打破つて飛出すや、天上界も狭しとばかり荒れ狂うた。群がる天兵を打倒し薙ぎ倒し、三十六員の雷將を率いた討手の大将祐聖真君を相手に、靈霄殿の前に戦うこと半日余り。そのときちようど、迦葉・阿難の二尊者を連れられた釈迦牟尼如来がそこを通りかかり、悟空の前に立ち塞がつて闘いを停めたもつた。悟空が怫然として喰つてかかる。如来が笑いながら言う。「たいそう威張つていようだが、いつたい、お前はいかなる道を修しえたというのか？」悟空曰く「東勝神州傲来国華果山に石卵より生まれたるこの俺の力を知らぬとは、さてさて愚かなやつ。俺はすでに不老長生の法を修し畢り、雲に乗り風に御し一瞬に十万八千里を行く者だ。」如来曰く、「大きなことを言うものではない。十万八千里はおろかわが掌上上つて、さて、その外へ飛出すことすらできまいに。」「何を！」と腹を立てた悟空は、いきなり如来の掌上に跳り上がった。「俺は通力によつて八万里を飛行するの、俺の掌上の外に飛出せまいとは何事だ！」言いも終わらず舂斗雲に打乗つてたちまち二、三十万里も来たかと思われるころ、赤く大いなる五本の柱を見た。渠はこの柱のもとに立寄り、真中の一本に、齊天大聖到此一遊と墨くろくろと書きしるした。さてふたたび雲に乗つて如来の掌上に飛帰り、得々として言つた。「掌どころか、すでに三十万里の遠くに飛行し

て、柱にしるしを留めてきたぞ！」「愚かな山猿よ！」と如来は笑った。「汝の通力が
 そもそも何事を成しうるといふのか？ 汝は先刻からわが掌の内を往返したにすぎぬでは
 ないか。嘘と思わば、この指を見るがよい。」悟空が異しんで、よくよく見れば、如来の
 右手の中指に、まだ墨痕も新しく、齊天大聖到此一遊と己の筆跡で書き付けてある。
 「これは？」と驚いて振り仰ぐ如来の顔から、今までの微笑が消えた。急に厳肅に変
 わった如来の目が悟空をキツと見据えたまま、たちまち天をも隠すかと思われるほどの大
 きさに拡がって、悟空の上のしかかかってきた。悟空は総身の血が凍るような怖ろしさを
 覚え、慌てて掌の外へ跳び出そうとしたとたんに、如来が手を翻して彼を取抑え、そのま
 ま五指を化して五行山とし、悟空をその山の下に押込め、唵嘛 叭唎の六字を金書し
 て山頂に貼りたもうた。世界が根柢から覆り、今までの自分が自分でなくなつたような
 昏迷に、悟空はなおしばらく顛えていた。事実、世界は彼にとってそのとき以来一変し
 たのである。爾後、餓うるときは鉄丸を喰い、渴するときは銅汁を飲んで、岩窟の中に
 封じられたまま、贖罪の期の充ちるのを待たねばならなかつた。悟空は、今までの極
 度の増上慢から、一転して極度の自信のなさに墮ちた。彼は気が弱くなり、ときには
 苦しきのあまり、恥も外聞も構わずワアワアと大声で哭いた。五百年経って、天竺への

旅の途中にたまたま通りかかった三蔵法師さんぞうほうしが五行山頂の呪符じゆふを剥はがして悟空を解き放はなてくれたとき、彼はまたワアワアと哭ないた。今度のは嬉うれし涙なみだであった。悟空が三蔵さんたうに随したがつてはるばる天竺までついて行こうというのも、ただこの嬉うれしさありがたさからである。実に純粹で、かつ、最も強烈な感謝であった。

さて、今にして思えば、釈迦牟尼しやくかむにによつて取抑とえられたときの恐怖が、それまでの悟空の・途方もなく大きな（善悪以前の）存在に、一つの地上的制限を与えたものようである。しかもなお、この猿の形をした大きな存在が地上の生活に役立つものとなるためには、五行山の重みの下に五百年間押し付けられ、小さく凝ぎやうこ集じゆする必要があつたのである。だが、凝ぎやうこ固こして小さくなつた現在の悟空が、俺おれたちから見ると、なんと、段違いにすばらしく大きくみごとであることか！

三蔵法師は不思議な方である。実に弱い。驚くほど弱い。変化へんげの術ももとより知らぬ。途みちで妖怪ようかいに襲おそわれれば、すぐに掴つかまってしまう。弱いというよりも、まるで自己防衛の本能がないのだ。この意気地のない三蔵法師に、我々三人が斉ひとしく惹ひかれていたというのは、いったいどういうわけだろう？（こんなことを考えるのは俺だけだ。悟空ごくうも八戒はっかい

もただなんとなく師父しふを敬愛けいあいしているだけなのだから。私は思うに、我々は師父のあの弱さの中に見られるある悲劇的なものに惹ひかれるのではないか。これこそ、我々・妖怪からの成上がり者には絶対ぜったいにないところのものなのだから。三蔵法師は、大きなものの中における自分の（あるいは人間の、あるいは生き物の）位置を——その哀れさと貴とうとさをハッキリ悟さとっておられる。しかも、その悲劇性に堪たえてなお、正しく美しいものを勇敢ゆうかんに求めていかれる。確かにこれだ、我々になくて師あに在るものは。なるほど、我々は師よりも腕力うでぢからがある。多少の変化の術も心得こころえている。しかし、いったん己おのれの位置の悲劇性を悟さとったが最後、金輪際こんりんざい、正しく美しい生活を真面目まじめに続けていくことができずに違ちがいがない。あの弱い師父しふの中にある・この貴い強さには、まったく驚嘆おどろきのほかはない。内なる貴さが外そとの弱さに包つつまれているところに、師父の魅力があるのだと、俺われは考える。もつとも、あの不埒ふちちな八戒はつかいの解釈によれば、俺たちの——少なくとも悟空ごくうの師父に対する敬愛の中には、多分に男色的要素おんなじきが含まれているというのだが。

まったく、悟空ごくうのあの実行的な天才に比べて、三蔵法師は、なんと実務的には鈍物どんぶつであることか！ だが、これは二人の生きることの目的が違ちがうのだから問題にはならぬ。外面めん的な困難くわんなんにぶつかつたとき、師父は、それを切抜きりぬける途みちを外そとに求めずして、内うちに求める。

つまり自分の心をそれに耐えうるように構えるのである。いや、そのとき慌あわてて構えずとも、外的な事故によって内なるものが動揺を受けないように、平生へいせいから構えができてしまっている。いっどこで窮きゆう死してもなお幸福でありうる心を、師はすでに作り上げておられる。だから、外に途を求めする必要がないのだ。我々から見ると危あぶなくてしかたのない肉体上の無防禦むぼうぎよも、つまりは、師の精神にとって別にたいした影響はないのである。悟空のほうは、見た眼にはすこぶる鮮やかだが、しかし彼の天才をもつてもなお打開できないような事態が世には存在するかもしれない。しかし、師の場合にはその心配はない。師にとつては、何も打開する必要がないのだから。

悟空には、嚇怒かくどはあつても苦悩はない。歡喜はあつても憂ゆう愁しゆうはない。彼が単純にこの生を肯定こうていできるのになんの不思議もない。三蔵法師の場合はどうか？ あれの病身と、禦ふせぐことを知らない弱さと、常に妖怪ようかいどもの迫害を受けている日々とをもつてして、なお師父しふは怡たのしげに生を肯うべなれる。これはたいしたことではないか！

おかしいことに、悟空は、師の自分より優まさっているこの点を理解していない。ただなんとなく師父しふから離れられないのだと思つている。機嫌きげんの悪いときには、自分が三蔵法師に随したがつているのは、ただ緊箍咒きんこうじゆ（悟空の頭に箝はめられている金の輪で、悟空が三蔵法師の

命に従わぬときにはこの輪が肉に喰い入って彼の頭を緊め付け、堪えがたい痛みを起すのだ。) のためだ、などと考えたりしている。そして「世話の焼ける先生だ。」などとブツツ言いながら、妖怪に捕えられた師父を救い出しに行くのだ。「あぶなくて見ちゃいられない。どうして先生はあなんだろうなあ！」と言うとき、悟空はそれを弱きものへの憐愍だと自惚れているらしいが、実は、悟空の師に対する気持の中に、生き物のすべてがもつ・優者に対する本能的な畏敬、美と貴さへの憧憬がたぶんに加わっていることを、彼はみずから知らぬのである。

もつとおかしいのは、師父自身が、自分の悟空に対する優越を、ご存じないことだ。妖怪の手から救い出されるたびごとに、師は涙を流して悟空に感謝される。「お前が助けてくれなかったら、わしの生命はなかったろうに！」と。だが、実際は、どんな妖怪に喰われようと、師の生命は死にはせぬのだ。

二人とも自分たちの真の関係を知らずに、互いに敬愛し合って(もちろん、ときにはちよつとしたいさかいはあるにしても) いるのは、おもしろい眺めである。およそ対蹠的なこの二人の間に、しかし、たった一つ共通点があることに、俺は気がついた。それは、二人がその生き方において、ともに、所与を必然と考え、必然を完全と感じていることだ。

さらには、その必然を自由と看做みなしていることだ。金剛石こんごうせきと炭とは同じ物質からでき上がっているのだそうだが、その金剛石と炭よりもっと違い方のはなはだしいこの二人の生き方が、ともにこうした現実の受取り方の上に立っているのはおもしろい。そして、この「必然と自由の等置とうち」こそ、彼らが天才であることの徴しるしでなくてはなんでしょうか？

悟空ごくう、八戒はっかい、俺おれと我々三人は、まったくおかしいくらいそれぞれに違っている。日が暮れて宿がなく、路傍の廃寺に泊まることに相談が一決するときでも、三人はそれぞれ違った考えのもとに一致しているのである。悟空はかかる廃寺こそ究くつきょう、竟きやうの妖怪退治ようかいたいぢの場所だとして、進んで選ぶのだ。八戒は、いまさらよそを尋ねるのも億劫おっくうだし、早く家にはいつて食事もしたいし、眠くもあるし、というのだし、俺の場合は、「どうせこのへんは邪悪な妖精ようせいに満ちているのだろう。どこへ行ったって災難に遭あうのだとすれば、ここを災難の場所として選んでもいいではないか」と考えるのだ。生きものが三人寄れば、皆このように違うものであろうか？ 生きものの生き方ほどおもしろいものはない。

孫行者そんぎやうじやの華やかさに圧倒されて、すっかり影の薄らいだ感じだが、猪悟能ちよごのうはっかい八戒も

また特色のある男には違いない。とにかく、この豚は恐ろしくこの生を、この世を愛しておる。嗅覚・味覚・触覚のすべてを挙げて、この世に執しておる。あるとき八戒が俺に言ったことがある。「我々が天竺へ行くのはなんのためだ？ 善業を修して来世に極楽に生まれんがためだろうか？ とところで、その極楽とはどんなところだろう。蓮の葉の上に乗っかってただゆらゆら揺れているだけではしようがないじゃないか。極楽にも、あの湯気の立つ羹をフウフウ吹きながら吸う楽しみや、こりこり皮の焦げた香ばしい焼肉を頬張る楽しみがあるのだろうか？ そうでなくて、話に聞く仙人のようにただ霞を吸って生きていくだけだったら、ああ、厭だ、厭だ。そんな極楽なんか、まっぴらだ！ たとえ、辛いことがあつても、またそれを忘れさせてくれる・堪えられぬ怡しさのあるこの世がいちばんいいよ。少なくとも俺にはね。」そう言うてから八戒は、自分がこの世で楽しいと思う事柄を一つ一つ数え立てた。夏の木蔭の午睡。溪流の水浴。月夜の吹笛。春暁の朝寐。冬夜の炉辺歓談。……なんと愉しげに、また、なんと数多くの項目を彼は数え立てたことだろう！ ことに、若い女人の肉体の美しさと、四季それぞれの食物の味に言い及んだとき、彼の言葉はいつまで経つても尽きぬもののように思われた。俺はたまげってしまった。この世にかくも多くの怡しきことがあり、それをまた、かくも余すところなく味

わっているやつがいようなどは、考えもしなかったからである。なるほど、楽しむにも才能の要るものだなと俺は気がつき、爾来、この豚を軽蔑することを止めた。だが、八戒と語ることが繁くなるにつれ、最近妙なことに気がついてきた。それは、八戒の享樂主義の底に、ときどき、妙に不気味なものの影がちらりと覗くことだ。「師父に対する尊敬と、孫行者への畏怖とがなかったら、俺はとつくにこんな辛い旅なんか止めてしまつていたろう。」などと口では言っている癖に、実際はその享樂家的な外貌の下に戦々兢兢々々として薄氷を履むような思いの潜んでいることを、俺は確かに見抜いたのだ。いわば、天竺へのこの旅が、あの豚にとつても（俺にとつてと同様）、幻滅と絶望との果てに、最後に絶り付いたただ一筋の糸に違いないと思われる節が確かにあるのだ。だが、今は八戒の享樂主義の秘密への考察に耽つているわけにはいかぬ。とにかく、今のところ、俺は孫行者からあらゆるものを学び取らねばならぬのだ。他のことを顧みている暇はない。三蔵法師の智慧や八戒の生き方は、孫行者を卒業してからのことだ。まだまだ、俺は悟空からほとんど何ものをも学び取つておりはせぬ。流沙河の水を出てから、いったいどれほど進歩したか？ 依然たる呉下の旧阿蒙ではないのか。この旅行における俺の役割にしたつて、そうだ。平穩無事のときに悟空の行きすぎを引き留め、毎

日の八戒の怠惰たいだを戒めいましること。それだけではないか。何も積極的な役割がないのだ。俺みたいな者は、いつどこの世に生まれても、結局は、調節者、忠告者、観測者にとどまるのだろうか。けつして行動者にはなれないのだろうか？

孫行者の行動を見るにつけ、俺は考えずにはいられない。「燃え盛る火は、みずからの燃えていることを知るまい。自分は燃えているな、などと考えているうちは、まだほんとうに燃えていないのだ。」と。悟空ごくうの闊達無碍かつたつむげの働きを見ながら俺おれはいつも思う。「自由な行為とは、どうしてもそれをせすにはいられないものが内に熟してきて、おのずと外に現われる行為の謂いだ。」と。ところで、俺はそれを思うだけなのだ。まだ一步でも悟空についていけないのだ。学ぼう、学ぼうと思いつながら、悟空の雰囲気ふんいきの持つ桁違けたちがいの大きさに、また、悟空的なものの肌合はだあいの粗あらさに、恐れをなして近づけないのだ。実際、正直なところを言えば、悟空は、どう考えてもあまり有難ありがたい朋輩ほうばいとは言えない。人の気持きもちに思い遣りやがなく、ただもう頭からガミガミ怒鳴り付ける。自己の能力を標準たまにして他人ひとにもそれを要求し、それができないからとて怒りおこつけるのだから堪たまらない。彼は自分の才能の非凡さについての自覚がないのだとも言える。彼が意地悪でないことだけは、確かに俺たちにもよく解わかる。ただ彼には弱者の能力の程度がうまく呑み込のみ込めず、したがって、

弱者の狐疑・躊躇・不安などにいつこう同情がないので、つい、あまりのじれったさに疝癩を起すのだ。俺たちの無能力が彼を怒らせさえしなければ、彼は実に人の善い無邪気な子供のような男だ。八戒はいつも寐すごしたり怠けたり化け損つたりして、怒られどおしである。俺が比較的彼を怒らせないのは、今まで彼と一定の距離を保っていて彼の前にあまりボロを出さないようにしていたからだ。こんなことではいつまで経つても学べるわけがない。もつと悟空に近づき、いかに彼の荒さが神経にこたえようとも、どんな叱られ殴られ罵られ、こちらからも罵り返して、身をもってあの猿からすべてを学び取らねばならぬ。遠方から眺めて感嘆しているだけではなんにもならない。

夜。俺は独り目覚めている。

今夜は宿が見つからず、山蔭の溪谷の大樹の下に草を藉いて、四人がごろ寝をしている。一人おいて向こうに寐ているはずの悟空の鼾が山谷に飴するばかりで、そのたびに頭上の木の葉の露がパラパラと落ちてくる。夏とはいえ山の夜気はさすがにうすら寒い。もう真夜中は過ぎたに違いない。俺は先刻から仰向けに寐ころんだまま、木の葉の隙から覗く星どもを見上げている。寂しい。何かひどく寂しい。自分があの淋しい星の上にたつ

た独りで立つて、まつ暗な・冷たい・なんにもない世界の夜を眺めているような気がする。星というやつは、以前から、永遠だの無限だのということを考えさせるので、どうも苦手にだ。それでも、仰向あおむいているものだから、いやでも星を見ないわけにいかない。青白い大きな星のそばに、紅あかい小さな星がある。そのずっと下の方に、やや黄色味を帯びた暖かそうな星があるのだが、それは風が吹いて葉が揺れるたびに、見えたり隠れたりする。流れ星が尾を曳ひいて、消える。なぜか知らないが、そのときふと俺は、三蔵法師さんぞうほうしの澄んだ寂しげな眼を思い出した。常に遠くを見つめているような・何物かに対する憫あわれみをいつも湛たえているような眼である。それが何に対する憫あわれみなのか、平生へいせいはいっこう見当が付かないでいたが、今、ひよいと、判わかったような気がした。師父しふはいつも永遠を見ていらる。それから、その永遠と対比された地上のなべてのものの運命さだめをもはつきりと見ておられる。いつかは来る滅亡ほろびの前に、それでも可憐かれんに花開こうとする叡智ちえや愛情なさけや、そうした数々の善よきものの上に、師父は絶えず凝乎じつと慙あわれみの眼まなざし差そそを注いでおられるのではなからうか。星を見ていると、なんだかそんな気がしてきた。俺は起上がって、隣ねに寝ておられる師父の顔を覗のぞき込む。しばらくその安らかな寝顔を見、静かな寝息を聞いているうちに、俺は、心の奥に何かがポツと点火されたようなほの温かさを感じてきた。

——「わが西遊記」の中——

青空文庫情報

底本：「李陵・山月記・弟子・名人伝」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年9月10日改版初版発行

1983（昭和58）年9月30日改版24版発行

入力：佐野良二

校正：かとうかおり

1999年2月9日公開

2011年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

悟浄歎異

—沙門悟浄の手記—

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 中島敦

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>